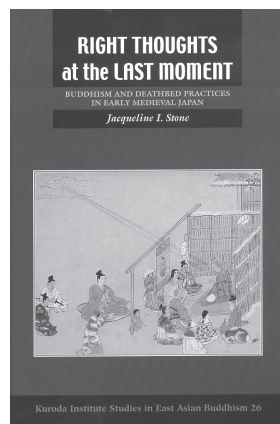


ジャクリン・I・ストーン

## 『臨終正念——中世初期の仏教と臨終の実践』

Jacqueline I. Stone, *Right Thoughts at the Last Moment:**Buddhism and Deathbed Practices in Early medieval Japan.*

末木文美士



University of Hawai'i Press, 2016.

「臨終正念」と言っても、特に英語では、専門知識のない人には何のことも分からないであろう。あえて見慣れない用語で何だろうと思わせ、副題でこういうことかと思わせる作戦である。副題の通りに、本書は平安中期から院政期、即ち十世紀末から十二世紀にかけての死の儀礼を、執念とも言えるほど徹底的に追求して、全体で六百頁近い大冊となっている。

その主要な資料とされているのは、往生伝類と臨終行儀書と呼ばれるテキスト群である。往生伝類に関しては、戦後の一時期研究者の注目を集めたことがあった。それは、井上光貞、家永三郎氏らによって、浄土教中心史観とも言うべきものが仏教史学の主流となったことによる。その最大の成果は『日本思想大系』に収められた『往生伝・法華験記』（井上光貞・大曾根章介編、岩波書店、

一九七四）の巻であり、往生伝類の基本テキストと註が提供されることになった。しかし、この浄土教中心史観は、鎌倉期の法然・親鸞を日本仏教の頂点と見る鎌倉新仏教中心史観とセットになったものであった。それ故、往生伝類は、悪人往生や民間聖の活動など、新仏教に連なる要素を含む点が評価されたのであって、それ自体として評価研究されたわけではなかった。その後、顕密体制論が出て、浄土教中心史観が崩れる中で、往生伝は研究者の中心的な関心から外れることになった。

もう一つの本書の基本資料は臨終行儀書である。これは臨終の作法を記したマニュアルであるが、これまで各宗派の中で多少の研究はあるものの、その枠を外して宗教史の大きなテーマとして論じられることはなかった。本書は巻末付録として、臨終行儀書

の解説付きの目録を付しているが、そこには平安時代から江戸時代にまでわたる十八種類の臨終行儀書が解説されていて、このリストだけでも貴重である。

こうして、本書は往生伝と臨終行儀書という打ち捨てられた資料群に沈潜し、膨大な資料を縦横に活用して、中世初期の仏教的な死にざまを明らかにしていく。そこには、確かに法然の名前はしばしば現れるものの、従来の仏教史の表舞台の主人公だった親鸞・道元などは、終わりのほうでちよつと出てくるだけで、本書の中心をなすのは多数の無名の往生者たちである。臨終行儀の出发点となるのは源信の『往生要集』と二十五三昧会の活動で、さすがにそのあたりは知られているが、その後の実範・覚鑿・道範などは、これまで密教浄土教として名が出る程度であつただろう。

それならば、本書は中世浄土教史の書き直しなのであろうか。じつは私も最初はそのような思い込みで読み始めたのだが、読み進むにつれてその間違いを痛切に思い知らされることになった。本書は、死の儀礼化というまったく新しい視点から日本の仏教史、あるいは精神史を読み直すきわめて野心的な試みである。そこでは、アリエスなどのアナル学派や最近の文化人類学などの影響も受けながら、死の捉え直しという現代的なテーマを歴史の中から読み解くという作業が、地道で根気のいる文献解説を通して果たされている。著者はそのために十数年に及ぶ年月をかけて周到

に準備を進め、本書刊行以前には、仏教における死の問題を扱う注目すべき論文集二冊を共同編集で出版している<sup>①</sup>。

ここで、著者について簡単に紹介しておこう。ストーン氏は UC LA で W・ラフルーア教授 (William LaFleur 後、ペンシルベニア大学教授。二〇一〇年逝去) の指導を受け、博士論文は日蓮の偽書とされる遺文の検討を行った<sup>②</sup>。博士論文に手を加えて出版するのが一般的であるが、問題が特殊過ぎるので、代わりに新たに本覚思想に関する大著を書き下ろして出版した<sup>③</sup>。徹底的な文献解説に基づく日本中世仏教史の解明に定評がある。プリンストン大学宗教学部教授として、多くの日本宗教研究者を育てている。さて、それでは本書の内容を見てみよう。目次は以下の通りである。

#### 序論

- 1、日本における臨終作法のはじめ (The Beginning of Deathbed Practice in Japan)
- 2、はるか彼方の領域 (A Realm Apart)
- 3、典型的な死 (Exemplary Death)
- 4、瑞祥の解釈 (Interpreting the Signs)
- 5、不安 (Anxieties)
- 6、臨終の介助者 (Deathbed Attendants)

## 7、臨終儀礼の長き持続 (The Longue Durée of Deathbed Rites)

### 結論

序論は、本書の目的・前提・資料などを述べるが、その中で、本書を通しての重要な視点として、死に関する論理の重層という問題が提示されている。即ち、臨終行儀を成り立たせるには、三つの相互に矛盾も含む論理が重層しているという (pp. 6)。第一は、「個人的な努力と責任の論理」であり、個人は過去の行為の結果を受けなければならないというものである。即ち、よき来世を得るためには生前に善行を積まなければならない。第二は、仏式の葬儀の根本にあるのは、「功德の譲渡」(廻向) という論理である。これにより、もはや善行をなし得ない他者(死者)に、援助者の功德を譲渡し、死者の功德としてよき来世に資することができる。第三に、「臨終の論理」がある。これは、「最後の思念は非常に強力で、一生の間の悪行を乗り越え、よりよい来世や、解脱さえも可能にする」というものであり、臨終行儀の根幹を成り立たせる。この三つの論理は相互に矛盾しながらも、望ましい来世を得るためのさまざまな実践の根底となっている。

本論をざっと概観しておく、第一章では、臨終儀礼を歴史的に展望する。十世紀後半に、源信が『往生要集』を撰述し、慶滋保胤が最初の往生伝である『日本往生極楽記』を著わし、さらに

二十五三昧会が結成されて、往生の儀礼が実践されるようになる。そこからその後への展開を展望している。

第二章以下は、往生伝、臨終儀礼、貴族の日記などを使いながら、往生儀礼の具体的な問題を解明していく。第二章では、浄土との隔絶の問題を論ずる。死後に往生すると言っても、浄土ははるか彼方であり、不知の他者の世界である。しかし、その世界へ入るには現世の準備行為が必要であり、そこで往生の問題は社会的な側面を持つことになる。そこからジェンダーや悪人の問題が生まれることになる。第三章は、具体的な死の儀礼の手順を追ってゆく。往生する人はあらかじめ死期を知り、身心を浄め、戒を受けて、無常院に入る。そこで、定められた方式に従って臨終を迎え、往生すると何らかの形でその瑞祥を示す。このように、往生者の死の儀礼は細かく規定されている。第四章は、その往生の瑞祥をだれが受け取り、どのように解釈するかという問題を取り上げる。その点で、往生はきわめて社会的な問題になる。往生は聖なる世界に入ることであるが、同時に死のケガレの危険を持ち、その両義性の中で捉えられる。第五章では、はたして臨終を正しく迎えられるかという不安の問題を取り上げる。病気の苦痛やさまざまな執着の中で正念を保つことは容易ではない。それを乗り越えるために、さまざまな工夫が必要となる。それでも好相をもって死ねなかった場合は、それにどう対処するかが遺された者

の課題となる。

以上は死にゆく者の準備と手順であるが、その中でしばしば著者が注意を促すのは、死が個人だけの問題ではなく、他者との関わりの中で生ずる社会的な問題でもあるということである。第六章はこの点を正面から取り上げる。臨終を正しく迎えられるためには、死にゆく者を身体的にも精神的にも介助し、世話する仲間が必要である。それが善知識と呼ばれ、死にゆく者がよき死を得られるためにきわめて大きな役割を果たすことになる。

このように読んでくると、はじめは遠い昔の奇妙な風習の話のようだったが、次第にそれが現代の死の作法とオーバラップしてくる。第六章まで来ると、これはまったくホスピスにおける看取りの問題と一つになってしまう。第七章でその後の歴史的展開を述べるが、臨終行儀が近代の初めまで続いていたというのも、納得がいくところがある。

こうして、結論では、序論で出た三つの論理を再び取り上げるが、それはより深められた目で見ることができると。第一の個人的な修練と第二の他者による援助とが、第三の臨終においてぎりぎりのところで結びあうことになる (p. 376)。これは今日で言えば死にゆく者の看取りの知恵に他ならない。本書はこのように千年の昔と現代を絡み合わせながら、仏教史を見る新しい視点を提供する。それはまさしく死に立ち向かう知恵の集積だったのだ。

すでに許された紙幅はほとんどないが、最後に本書によって提示された死の理論と実践としての仏教という視点を、もう一度中世に戻して位置づけてみたい。近年、このような死の側面とともに、中世仏教における生(性と誕生)の問題が注目されている。即ち、五藏曼荼羅と呼ばれる身体観想法から、母胎内で胎児が成長し、誕生する過程を観想する胎内五位説へと発展するのである。<sup>(1)</sup>このように中世仏教は、生と死の両方にわたってきわめて深い思索と実践を積み重ねていたのである。その両面が切り結ぶ核として、覚鑿において大きく展開した五輪思想、あるいは五輪塔の思想があつたのではないかというのが、今の私の仮説である。

#### 注

- (1) Bryan J. Cuevas and Jacqueline I. Stone (ed.), *The Buddhist Dead: Practices, Discourses, Representations*, Honolulu: University of Hawaii Press (A Kuroda Institute Book), 2007; Jacqueline I. Stone and Mariko Namba Walter (ed.), *Death and the Afterlife in Japanese Buddhism*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2008.
- (2) Jacqueline I. Stone, *Some Disputed Writings in the Nichiren Corpus: Textual, Hermeneutical and Historical Problems*, Los Angeles: University of California, 1990.
- (3) Jacqueline I. Stone, *Original Enlightenment and the Transformation of Medieval Japanese Buddhism*, Honolulu: University of Hawaii Press (A Kuroda Institute Book), 1999.
- (4) これについては、二〇一一年、二〇一四年、二〇一七年のヨーロッパ

---

日本学協会（E A J S）大会で、阿部泰郎氏を中心とするグループが連続してパネルを開いて、新出資料を紹介しながら、最新の知見を発表してきている。